

# 第5回「新・京都市産業振興ビジョン(仮称)」策定検討委員会 発言要旨の整理

(平成 22 年 12 月 9 日(木) 京都ホテルオークラ)

テーマ	主な発言の概要
人材育成 人材活用	<ul style="list-style-type: none"> <li>●<b>グローバル人材の育成</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 国内からアジアへの市場移転が非常に早く進んでいる。国内の製造業者はアジア諸国のニーズに対応していない。マーケティングに対する感性を磨き、グローバル人材の育成に取り組まなければならない。</li> </ul> </li> <li>●<b>海外からの人材の活用</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中国四川省のインキュベーション施設では、全国から優秀な人材を集め、優れたビジネスプランを持つ者を行政が雇用し、起業するための準備を支援している。国内外の優秀な人材を獲得するための仕組みづくりが重要である。</li> <li>・ 京都には、様々な国からの留学生がいる。留学生をどのように活用するのかといった視点がほしい。</li> <li>・ 京都でも海外から人材を呼び込んでこないと、世界に通用するベンチャー企業は生まれにくい。</li> </ul> </li> </ul>
起業家支援 事業化支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>●<b>ベンチャーに関する情報の発信</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ベンチャー企業への就職を希望する学生はいるが、実際にベンチャー企業を知る機会がない。ベンチャー企業の魅力、情報をもっと発信していくべきだろう。それが雇用にもつながるのではないか。</li> </ul> </li> <li>●<b>ベンチャーを育成する環境の整備</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「イノベーションを追及していく」といった記述がない。日本もイノベーションを追求していかなければならない。</li> <li>・ ベンチャー企業が育つ環境整備をどのように進めていくかを記述すべき。</li> <li>・ 日本人が起業できるような環境を整えることが重要である。京都ならばそうした環境をつくることができる。</li> <li>・ 「ベンチャー特区」が必要である。場所や設備、サポート人員などを支援し、一人でも起業できるような環境にしていかなければならない。</li> </ul> </li> <li>●<b>ベンチャーを取り巻く税制等</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ エンジェルのような経済的な支援をする仕組みがないということが大きい。</li> <li>・ 日本ではエンジェルや寄付金への課税が大きい。ベンチャーを立ち上げて倒産したときのリスクが高く、成功したときの課税も大きい。これでは、起業しない方がよいということになる。</li> </ul> </li> <li>●<b>ベンチャーへの資金提供</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ベンチャー企業が資金借用する際の担保として、会計報告書の閲覧権限を用いるのはどうか。</li> <li>・ 商工会議所が作成を推進している「知恵の経営報告書」を企業経営のソフト面の担保と位置づけ、これによって資金提供できるようにしてはどうか。</li> </ul> </li> <li>●<b>第二創業の支援等</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 既存中小企業で世代交代が進んでいる。第二創業の支援が必要ではないか。第二創業では、経営ノウハウがあるので事業の成功確率も高くなる。</li> <li>・ 高度な技術開発だけがイノベーションなのではなく、経営のイノベーションなど様々なレベルのイノベーションがある。</li> </ul> </li> </ul>

テーマ	主な発言の概要
成果指標	<ul style="list-style-type: none"> <li>●<b>指標案</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 雇用者・就業者数も指標として適切。</li> <li>・ 新しいビジネスを生み出すことを目指すなら、起業化率、雇用創出数が成果指標になる。</li> <li>・ 京都市内の企業立地率はどうか。</li> <li>・ 科学技術分野で言えば特許数あるいは論文数などが指標となる。</li> <li>・ 開業率と廃業率はセットで指標にすべきである。</li> <li>・ 単純に人口の増減を指標にしてはどうか。</li> <li>・ ビジョン策定の趣旨の通りにいくなれば、所得と雇用ではないか。</li> <li>・ 例え付加価値率が低くとも、ものづくりの発展のためには中小企業のもつ技能の継承などは必要不可欠である。このため、付加価値率を指標とすることは適切ではない。</li> <li>・ 今回のビジョンは分野別計画なので、他の分野での影響が色濃く出るものを成果指標としてしまうと、ビジョンの成果かどうかがわからなくなる。</li> </ul> </li> <li>●<b>目標値の設定</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 指標の目標数値の設定についてはまったく議論されていない。</li> </ul> </li> </ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>●<b>中小企業支援の方向性</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 護送船団方式での中小企業の支援は難しくなっている。意欲、活力のある中小企業を積極的に支援すべき。</li> </ul> </li> <li>●<b>京都の強みとしての中小企業の集積</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ベンチャーから伝統産業、機械・金属などものづくりを支える中小企業など、多様な企業があることが京都の強みである。</li> </ul> </li> <li>●<b>ブランドの確立</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ このビジョンでは「新・価値創造都市」という新しいブランドを打ち出していこうとしている。戦略や先導プロジェクトの中で、ブランドの実現、強化に向けて取り組んでいるということを目に見えやすい形で示していくとよい。(例：市が主体となって実証実験など)</li> </ul> </li> </ul>